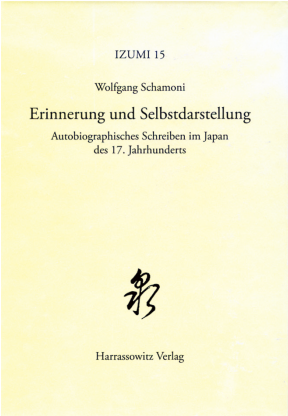
書評

ヴォルフガング・シャモニ『回想と自己演出——十七世紀日本の自伝』

Wolfgang Schamoni, *Erinnerung und Selbstdarstellung. Autobiographisches Schreiben im Japan des 17. Jahrhunderts*

ユディット・アロカイ



Harrassowitz Verlag, 2016

自伝や自叙伝とは「自分で書いた自身の伝記」というふうに定義されているが（『日本国語大辞典』）、この一般的な捉え方よりも十九世紀末に西洋自伝の影響を受けて成立した文学ジャンルや用語として認識されがちである。ヨーロッパでは特にルソーの『告白』、日本では福沢諭吉の『福翁自伝』が典型的な自伝として評価され、自伝の原型として模倣されてきた。この見方では啓蒙期以前のヨーロッパの自伝も、ヨーロッパ以外の文化圏の自伝も軽視される傾向が強く、研究対象にされるのはまれである。たとえ「自伝的作品」として認められていても、平安時代の日記や随筆、中世の紀行文、近世の（実録的な）家伝などが、自伝の視点からまとめて研究されることはほとんどない。江戸時代の自伝としてよく挙げられる『折りたく柴の記』（新井白石）、『夜職草』（鈴木牧之）、『夢酔独言』（勝小吉）などは、執筆の動機、ジャンル、形のうえで差異が多く、これらの独立したテクストを自伝として比較しても、「日本人の自伝の伝統」をなさない。しかし、ほかの「自伝的なテクスト」、回想文も視野に入れると、豊かな自己表現の世界が広がる。そこで、著者が問題化しているのは、日本人の自伝に表れる自我意識や自伝的テクストの歴史的真実性ではなく、自己言及が可能な様々なジャンルは執筆される内容にどのような影響を与えるのか、という点である。具体的にいえば、「中身が器を求めるのか、器が中身を生むのか」という問いかけに絞られるが、これは著者が二〇〇一年の『日文研』第二五号に発表した論文のタイトルにも見られる。

シャモニ氏のこの六百頁を超える単行本は、日本の「自分で書

いた自身の伝記」というタイプのテクストをその自伝的テクストとしての特徴に集中して読み直す試みである。もとにしている資料のリストに十七世紀に書かれた自伝的テクストが全部含まれるはずはないが、三十年間ほどの著者の研究、調査によって、日本の研究者からも協力を得て収集した作品リストである。範囲は「自身の経験をある程度の時間的な展望から顧みて生涯を語る」というふうに定義されているが、ここで取り入れられていないものは例えば自伝的序文や賛、自伝的な書簡などの割合短い文章である。

自伝という視座を設けることによって、普段異なるジャンルに属するテクストが色々な共通点を見せはじめる。著者の選んだ三十一のテクストはすべて十七世紀に書かれたもので、なかには女性によるテクスト三つがある。なぜ十七世紀を選んだのか、複数の理由がある。一六〇〇年から一七〇〇年までというのは、日本の歴史上あまり意味をなさない区分であるが、内乱の時代が終わって、江戸時代が始まる区切りでもあるし、新しい時代の政治的、社会的、文化的特徴が次第に形をとる期間でもある。自伝の歴史で言うと、中世に主に僧によって書かれた自伝がもっと広い範囲で書かれるようになって、家族や寺院の中で保存されて、次々の世代に伝授されていく。

著者が訴求対象として考えているのは、海外の日本学者と共に自伝研究に取り組んでいる歴史学者、文化比較研究者である。そのために歴史的背景を割合詳しく描いて、脚注で細かく様々な条件を説明している。補論として加えている「近世の人名に関する規定」は日本の苗字と名前を明確に紹介し、特に海外の読者にとってわかりにくいところである日本の人名を説明している。これは日本史、文化史に関わっている者にとってもとても便利な手がかりになる。そしてテクスト理解の前提条件としてもう一つの重要な点があげられる。すなわち、ドイツ語訳についてのコメント、「翻訳して失われるもの」に関する指摘である。ドイツ語訳では、原文は漢文であったのか、和文であったのか区別できなくなるから、自己表現の言語による差異が失われる。それよりも翻訳者にとって一番微妙なところは人称代名詞である。複数の一人称（そして、人称ゼロ）が使われる日本語と唯一の一人称代名詞しか用いないドイツ語の間には、翻訳でどうしても消えるニュアンスがある。日本語の待遇表現と自己名称として使われる三人称や号の翻訳は細かいところではあるが、ここではとてもよく考察されて相当するドイツ語に訳されている。

本書の構造は三つの部分からなる。問題意識を明確に展開する前文に続いて、十七世紀の歴史的な背景、一六〇〇年までの自伝・自叙伝の伝統、そして直接な背景としては十六・十七世紀の軍記・戦記が紹介される。

四五〇頁を占める本文では同じパターンに沿って三十一の自伝的なテクストが紹介されている。作品の（ときに複数ある）タイトルのオリジナルとドイツ語訳、それに続いて作者の伝記、テクストの成立とジャンル、伝播の条件と刊行（印刷）、内容の概要、ドイツ語訳、解釈（コメント）、出典と先行文献が記される。三十一人の作者のなかにはその生涯についての資料が豊富にある場合とほとんどない場合があり、それで個々の紹介が当然ある程度異なる。翻訳は圧倒的に部分訳であるが、三つの短い自伝が完全訳で載っている。元政「霞谷山人伝」（一六六八頃）、徳川光圀「梅里先生碑」（一六九一）、村上冬嶺「二魂伝」（一六九八）の三つのテクストである。三十一の具体例すべてをここでは紹介できないが、例としていくつか挙げたい。

木俣守勝は「紀年自記」（一六一〇）で軍記・戦記の伝統を踏まえて、子孫に忠と孝の徳を伝えるために参陣や軍功などを証する軍忠状を残している。中世の先例を模範としながらも自分の生涯を（封建制度の中の自分ではあるが）誕生から晩年まで語っており、自伝の前段階として興味深い。

現存する数の少ない女性の自伝の中では、京極伊知子の一六五〇年に書かれた「涙草」が自分の息子にその誕生と龍野の大名京極高和による猶子の条件を語る。スタイルの整った文学的な価値のある擬古文で、夫の死、子供との別れの悲しみを描いて、わずか九年間の出来事を報告しながら、平安時代の女性の日記を思わせる。

元政の「霞谷山人伝」、一六九字からなる漢文自伝は中国の伝記の形を守りながらそれをパロディ化して、五世紀の陶淵明「五柳先生伝」の伝統に沿う。自伝としては極端な例であるが、伝記と自伝の密接な関係と自伝の自己皮肉的な可能性を挙示する。

山鹿素行は古学派の代表者としてよく知られているし、その『配所残筆』（一六七五）は日本の自伝として昔から研究と翻訳の対象になっているテクストの一つである。本書のコンテクストでは、遺言書、年譜、覚書の複数の機能を果たしたこのテクストが、ほかのテクストと比較関連させられることによってその自伝としての特徴が立体的に提示される。

宇治加賀掾は「門弟教訓」（一六九七）の中で弟子に浄瑠璃の教えを二千六百字程度のテクストで説いたうえで、自分の生涯について六百字あまりの自伝を加えている。この芸談というジャンルに添えた序は、加賀掾の個人的な養成と自分が歩んできた芸能の道を範例として紹介している。

十七世紀自伝の具体例の解説が終わると総括として集めた資料の共通点や特徴が解釈されている。「自伝の諸ジャンル」というのは、著者の主な関心であるが、そこで自伝の「器」になる様々なジャンルの特徴と機能を説いている。十七世紀を一つの同時的な

断面にして、私的と公的な機能を指針に、書き上げ、奉公書、訴状、家伝、書、随筆、年譜、序、伝、行状などの特色を、本文で挙げられた具体例を引きながら説明している。「文体の諸特色」の部分は漢文、文語文、候文、擬古文の言葉遣いと文体的なニュアンスを紹介し、そして最後に作者の社会的環境と近世日本の自伝の機能とその社会の中の役割を緊密に観察して、十七世紀自伝の内容の主な傾向を概括する。

本書を読んで、日本に自伝の伝統がない、あるいは自伝は存在しても数が少ない、という見方は明らかに偏見であることがわかる。ここで紹介された三十一のテクストは幅広くその時代の自己表現の多様性を証明していて、歴史研究、文学研究においての意義がとても大きい。歴史研究者や文学専門家によって無視されがちなこのタイプのテクストは、学際的な、文学、歴史学、文献学を合わせた方法で捉えれば、日本の自伝研究に刺激を与える可能性を持つし、海外の歴史研究、比較研究の視点からも大事な研究成果である。例えば、ヨーロッパの自伝が持つ教訓的範例(exemplum)の機能や自伝での夢の役割など、様々な共通点が見られ、将来性のある比較研究、共同研究のテーマでもある。もともと日本語で書かれているテクストを素材にしていながら、ドイツ語で記されている本書の研究成果を、ぜひ日本語に訳して日本の読者にも提供してほしい。日本の歴史自伝研究をこの原点から広げていけば、比較文化史のうえでも、文学史のうえでも、豊富な研究成果が期待できる。